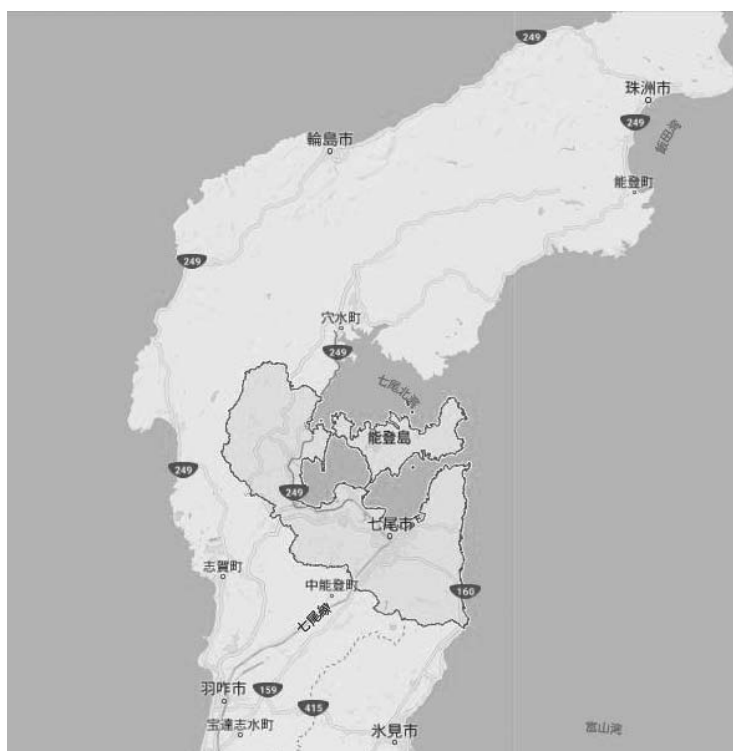


～ 能登地域寺院調査の概要報告 ～



●「第十回宗勢基本調査」結果を承けて
——石川教区を選定した理由——

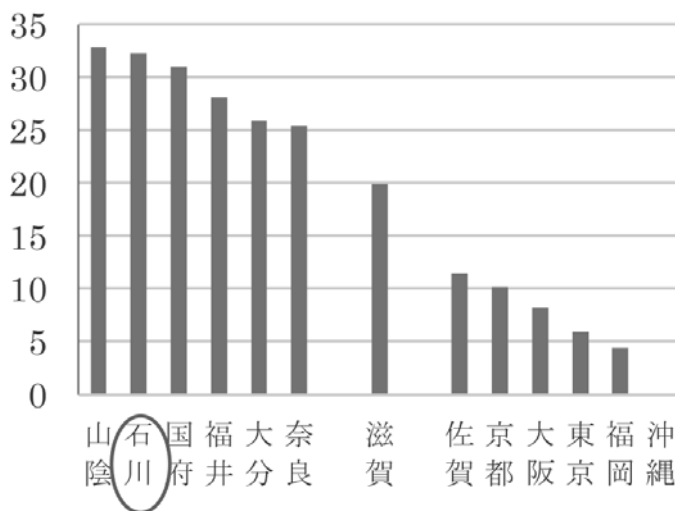
現在の日本は人口減少社会に移行しました。その結果、人手不足から経済の停滞や行政機能の低下など、さまざまな問題が生起すると予測されています。過疎問題・人口減少問題が課題となるなか、

総合研究所では寺院活動支援部（過疎地域対策担当）と共同で、寺院調査を行ってきました。主に山間部を中心に調査を行ってきましたが、今回は北陸の石川教区で調査を実施しました。

石川教区は県全体の人口減少率も高く、その影響もあるでしょう。二〇一五年に実施した「第十回宗勢基本調査」では、解散・合併を考えている寺院の割合が山陰教区について多

合が山陰教区について多いという結果が出ています。また、「年忌ねんき法要の継続」についても非常に厳しい数値が出ており、三回忌までしか続かないと回答された割合が二五・三％と全教区のなかでも高い数値が確認できました。こうした調査結果も踏まえつつ、これまでの山間部と異なる海浜部かいびんぶ、島嶼部とうしょの調査を実施するという目的も併せて

図表1 解散・合併を考えている寺院（教区別）



設定し、本年八月二五～二八日にかけて能登半島の中心に位置する七尾市を調査場所として実施しました。七尾市には能登島という島も含まれています。能登島では、集落の調査（ご縁調査）も実施しました（※）。

●宗派を超えた調査

今回の調査の特徴の一つは、宗派を超

えて実施したという点にあります。これまでは、基本的に本願寺派の寺院だけを調査対象としてきました。

しかし今回は、過疎問題連絡懇談会との密接な連携のなかで、本願寺派以外の寺院でも調査を行うことができました。調査にご協力いただいた教団は次のとおりです。

真宗大谷派／曹洞宗／高野山真言宗／日蓮宗／真言宗智山派／臨済宗妙心寺派

過疎問題連絡懇談会は、二〇一五年三月より真宗大谷派と協力し、「過疎問題」に取り組む各教団の情報交流を目的に設置されたものです。過疎問題は我々本願寺派だけの問題ではありません。そうした共通認識のもと、教団の垣根を越えて協力し、今回は、七尾市仏教会にも窓口になっていただけたため、計二〇カ寺もの寺院において、聞き取り形式で調査を実施することができました。

まだ分析途中で、詳細に報告することはないませんが、調査結果の一端を簡

単に報告いたします。

●寺院周辺の人口動態

調査地となった七尾市は、七尾湾や富山湾で採れる海産物を始め、和倉温泉や能登島などの観光地があり、七尾祇園祭や向田の火祭りなど祭りも盛んな地域です。七尾市仏教会に所属する寺院は約一〇カ寺あり、真宗大谷派が半数以上（六〇）を占め、本派一八、曹洞宗一六、日蓮宗六、真言宗四、浄土宗四…と続きます。

風光明媚で豊かな文化・歴史を持つ七尾ですが、一九八〇年当時七万近くあった人口は、二〇一五年現在、五万五千人と大きく減少しています。こうしたなか、お寺はどのような状況に置かれているのでしょうか。お寺の所在地周辺の人口についてお尋ねすると、「減少」「やや減少」と回答している寺院が七割以上となりました。周辺状況の活気についても「弱体化」「やや弱体化」が同じく七割以

上という結果が出ました。やはり地域の状況は厳しいようです。

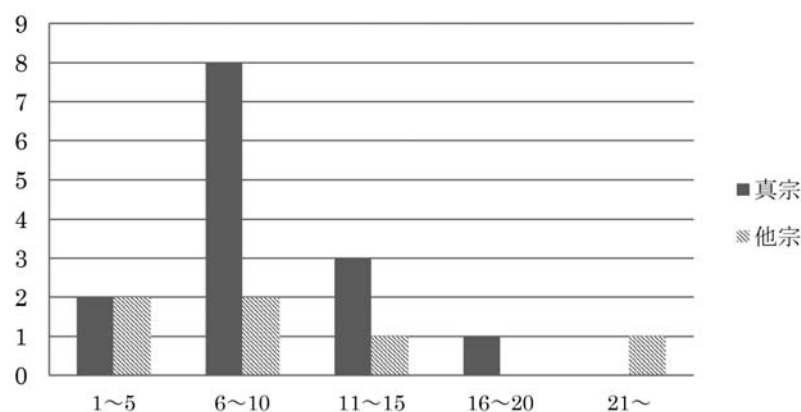
また調査した真宗寺院（本願寺派＋大谷派）の門徒戸数は三〇〇一〇〇戸に集中しており、大きな規模の寺院は無いなかで寺院運営が行われている状況だと言えます。

●お寺での法要

報恩講や永代経など、寺院で行う法要の数については、図表2のとおりです。最小値は二回で、最大値は四三回でした。他宗寺院は、法要回数の捉え方が異なるため単純な比較はできませんが、グラフからわかるように、当地では真宗寺院が熱心に法要を勤修されていることが窺えます。

これまで他宗との比較はできなかったわけですが、今回の調査では、お寺での法要の数という点においても、真宗寺院と他宗寺院には違いが見られそうであるという結果が出ました。

図表2 年間法要数（真宗 他宗 比較）



●月忌参りには地域差がある

では、門徒（檀家）宅に訪問する法務はどうでしょう。訪問型の法務が寺院の体力と関係しているのではないかと考え、研究所では訪問型の法務に注目して調査を実施しています。

まず、家庭報恩講です。こちらは真宗寺院だけの数値となりますが、かなりしっかりと実施されていることがわかりました。すべての寺院が家庭報恩講をお勤めしています。すべての門徒宅へ行くという寺院が、一二カ寺中七カ寺で、八割を超える寺院が八〇パーセント以上の門徒宅へお参りしています。

次に月忌参りについてですが、お勤めしている寺院と全くしていない寺院が、半々にわかれる結果となりました。宗勢調査でも明らかとなりましたが、月忌参りには、地域差があります。七尾市のかでも地域的な差が見られました。

七尾では月忌参りの結果はわかれましたが、家庭報恩講を通して、お寺と門徒とのご縁の強化が図られていると言えます。

●ご縁の力か、法事の告知か

先程ふれましたように、「第十回宗勢基本調査」で、石川教区は「年忌法要」

が三回忌までしか続かないお寺が多いという結果が出ました。そこで、何回忌まで続くのかを尋ねた結果が図表3です。

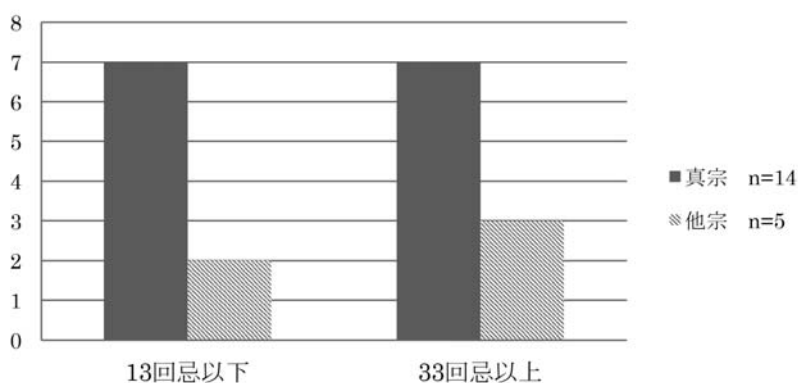
ご覧のとおり、一三回忌までしか続かないグループと三三回忌以上継続されるグループに、見事にわかれてきました。また、三三回忌以上続くと回答した寺院のほとんどが、五〇回忌まで続くことが多くと回答されています。

ので、続く寺院と続かない寺院とわかれる結果になっています。

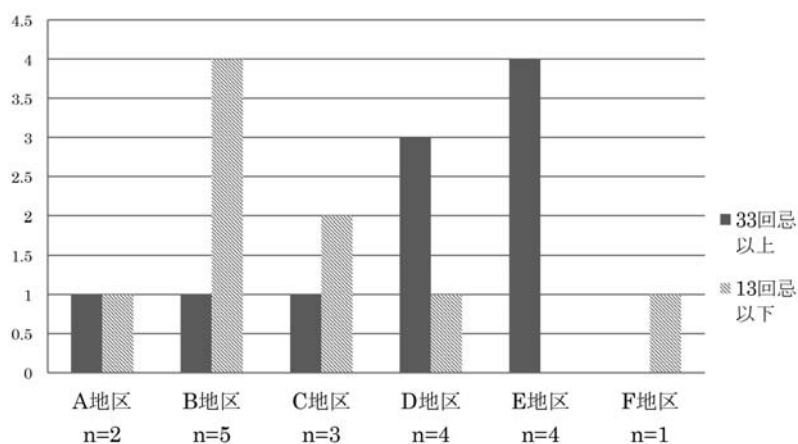
これを地区別に見ると、図表4になりま
す。B・C・F地区は一三回忌まで、D・E地区は三三回忌まで続いていました。

さらに、詳細な分析を進めないと明確になりませんが、すべての寺院が三三回忌以上まで続くと回答したE地で

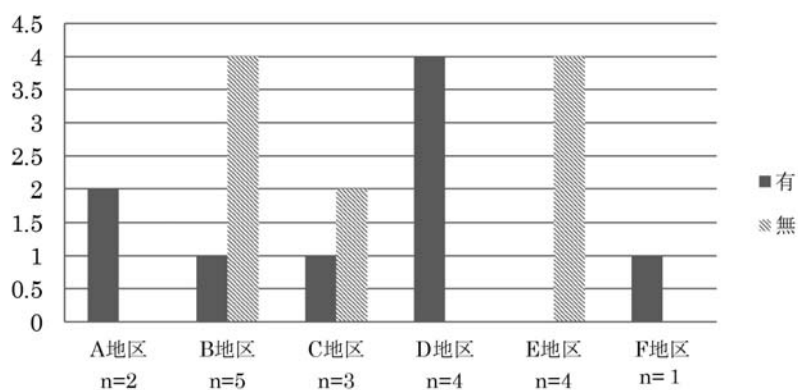
図表3 何回忌まで続くか（真宗 他宗 比較）



図表4 年忌継続 地区別



図表5 年忌告知の有無



区は、法事に一〇〇人以上の方が参列されるなど地域内のご縁の力が非常に強いことがわかりました。こうした人びとの関係の強さ——ご縁の力——がお寺を媒介として形成されており、そのことが法事の継続をもたらししているのではないかと予想しています。

かについてもお聞きしました（図表5）。その結果、「知らせている」「知らせていない」が半々となりました。調査対象とした寺院のなかには、毎年、仏壇に置けるような年忌の案内（法名と年忌を記したもの）を配布する寺院がありました。こうした取り組みをする寺院では年忌が継続されているという結果が出ていま

す。

しかし、年忌の続くE地区では告知は一切行っていない。

すなわち、年忌の継続については、従来型の人びとのつながり（ご縁）の力があれば、それによっても継続される。しかし、それが強力でない場合は、やはり告知など寺院からのほたらきかけの有無によって差が生じているのです。調査対象の数が多くないため断言することは難しいですが、このような印象を受けました。

年忌の継続は、仏縁をいただくきっかけの一つであり、寺院運営にとっても重要な要素だと言えます。年忌継続については、「告知」が一つの課題と言えそうです。

●離郷門徒に対するはたらきかけ

当地から、入学や就職などを契機に離れて暮らす門徒の方々も多数おられるようです。当地を出て、クリーニング屋・

豆腐屋・銭湯の経営に携わる人が昔から多いと、さまざまな寺院から教えていただきました。

特に銭湯文化は、北陸の方々によって、首都圏や関西圏などで広く浸透していったといわれています。ある寺院では、かつて門徒さんが東京へ出て、一〇〇軒以上の銭湯ができたそうです。先に行った人が、あとから出てきた人にノウハウを提供し、次から次へと銭湯ができました。あるご住職は、多い時には一年の内三カ月間、東京の銭湯に寝泊まりしながらお参りをしたそうです。これには、お寺を媒介としたご縁の力がはたらいていると感じさせられました。

●曹洞宗寺院のHPは多い

HPの開設については、「10年後、20年後の僧侶像・寺院像」でも課題とされています。この地域では、曹洞宗二カ寺、高野山一カ寺、真宗一カ寺でHPが開設されていました。曹洞宗は四カ寺の

内、二カ寺と半数のお寺が開設しているという結果になりました。これも宗派を超えた調査だからわかったことですが、曹洞宗では「曹洞宗石川県宗務所」が一括してHPを運用しており、寺院は情報を紙に書いて宗務所に送付するとHPが更新される形式だそうです。そのため開設率が高いのです。

ネットで検索し、アクセスし情報を得ることが多い現代社会において、インターネット上に情報をどう流していくかが、これからの寺院活性化に向けた重要なポイントになると考えられます。調査地だけではなく、これからの寺院のもう一つの課題がここにあるものと考えます。

●七尾地域に根付く風習

最後に、当地のすべての寺院で実施されていた「こんごう参り」をご紹介します。「こんごう」とは「魂迎」「金剛」「魂供」など諸説あり、未だ定説をみません。「婚後」という漢字をあてはめて

いるお寺もありました。

このお参りは、結婚した女性が、お盆を前に実家に帰り、お寺やお墓にお参りし、お寺で食事をとりながら語り合う行事です。参拝の減少傾向は見られるものの、地域の風習として、寺院も門徒の方々も大切に続けられています。

こうしたお参りの形態は、先程述べた「離郷門徒」を対象としたはたらきかけが、伝統的な形として根付いたものだと思われることができます。結婚したから地元のお寺とご縁が切れるわけではないですし、また時々ふるさとに戻ってこられる機会を作る仕組みともなっています。ある寺院では、遠くに出た方対象の法要が別途開催され、二〇人ほどの方が参拝し、昔話などで大いに盛り上げるとお聞きしました。

また、血縁ではない地域住民同士で、親子関係を結び、葬式や法事に参列しあったり、相談したりする「烏帽子親^{えぼしおや}」制度も確認できました。当地の人には今なお大切にされている仕組みです。地域で

の人間関係が希薄になっている方を選ぶということもあるようで、ご縁づくりそのものだと感じられました。門徒の一人はこの仕組みについて「人間は一人では生きられんから」と仰^{おつや}っていました。

このように、当地では、伝統的なご縁をつくり、受け継いでいく仕組みがあります。そして、それらはお寺と密接に係っています。こうした仕組みが人びとの相互支援（社会関係資本）となると同時に、寺院を支える仕組みともなっている点は重要ではないでしょうか。

ただ、課題もあります。これらの仕組みが今後も継承されるのか否かはわかりません。継承に不安をもちます方も沢山いらっしゃいました。これをどのように現代的なご縁として継いでいけるかは大きな課題でしょう。

● 小 結

以上、簡単ですが、寺院調査の一端について報告しました。まだ分析の途中で

あり、多くの宗派、多くの研究者の方々とともに詳細な分析を進めてまいります。

さらに、この調査では、地域を絞^{しぼ}り、そこに住む住民を対象とした「ご縁集落点検」（集落のインタビュー調査）を実施しました。地域にとってのお寺のあり方やこれからのお寺に期待することなどをお聞きしています。まだ、集計途中です。「寺院調査」と合わせ、地域住民の方から見たお寺の有り様について、分析を進めていく所存です。

寺院活動支援部（過疎地域対策担当）

総合研究所 那須公昭

※今回は寺院調査の単純集計の一部を紹介しており、集落のインタビュー調査については、あらためて報告いたします。